

〔研究ノート〕

総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

～県立S高校の実践事例を踏まえて～

渡 邊 一 朗

要旨

高校教育改革の流れの中で、新しいタイプの高校として複数の学科を設置した総合選択制高校が開校して、およそ30年を経過した。総合選択制高校は、学科の垣根を越えて幅広く学習が可能で、生徒の多様な学習ニーズに対応できるメリットもあるが、一方、複数の専門学科により構成されているため学校の一体化の醸成が難しい、入学志願者の減少の中、総合選択制高校の理解が進まないとの課題が指摘されていた。そこで、本稿では、このような課題解決に向けてS高校が実践した、地域や他学科の連携を深める取組み、中学校との連携による職業指導の充実に着目し、その成果と課題について検証することで、職業指導の意義や教職員の意欲を高める枠組みの重要性について考察を試みた。

Abstract:

As part of the trend of high school system reform, 'Sogo Sentaku-sei' High school, which different types of specialized courses as a new type of high school, opened in 1984. About 30 years have passed since then.

The 'Sogo Sentaku-sei' High school allows students to study broadly beyond the boundaries of specialized courses. In addition, there is an advantage that it can respond to diverse learning needs. However, it is difficult for the community to understand what they are learning in high school. And Students have a low sense of belonging to the school.

In order to solve the problems, I would like to introduce 'S' High School, which worked with the community and the middle school on educational activities. And

(2) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

I analyzed the activities of high schools and considered the importance of vocational guidance and teachers' motivation.

キーワード：職業指導，職業教育，キャリア教育，総合選択制高校

Keyword: Vocational Guidance, Vocational Guidance, Career Guidance, 'Sogo Sentaku-sei' High school

I 問題設定

高校には、主とする教育内容の違いにより普通科，専門学科，総合学科が設置されている。専門学科には、農業，工業，商業，家庭，福祉などの職業系の専門学科と理数，外国語，体育などの普通科系の専門学科に大きく分類される¹⁾。また，総合学科は，普通教科以外に職業系の教科を含め複数の科目が開設され，生徒の進路や興味・関心に応じて科目を選択して学習する教育課程を編成している²⁾。本稿では，記述の都合上職業系の専門学科を「専門学科」として論述することにする。

専門学科を有する学校は，これまで単一学科で学校を構成していたが，近年少子化の影響や生徒の多様化する学習ニーズ等に対応するため，「特色ある高校づくり」が強調され，高校の再編・統合が進み，複数の専門学科等が1校に統合された総合選択制高校が設立されている。

文部科学省が毎年実施している学校基本調査から，総合選択制高校が全国で初めて開設された1984年，単独の職業系専門高校（農業，工業，商業等の職業

1) 高等学校設置基準（平成16年文部科学省令第20号）第2章（学科の種類）第5条及び第6条により学科の設置が定められている。

2) 文部省初等中等教育局長通知（平成5年3月22日）「総合学科について」では，総合学科の教育課程に関して，「自己の進路への自覚を深めさせるとともに，将来の職業生活の基礎となる知識・技術等を習得させる（以下略）」と多様な教科・科目の設置，柔軟な教育課程編成などの徹底を求めている。

系学科のみが設置された高校)は、全高校の18.7%であった。しかし、30年後の2014年には、12.4%に大きく減少している。一方、総合学科単独校、専門学科と他学科が併設した高校は、30.8%から33.6%へ増加している。

再編・統合により、学校規模を一定程度維持できるため、多様な学習ニーズへの対応、部活動等の選択肢の確保などにより、学習意欲の向上や学校生活への適応の改善、学校の教育力の高まりや活性化の契機などが期待できる³⁾。しかし、総合選択制高校を構成する専門学科では、それぞれ専門性の高い教育課程で編成、運営されており、学科の行事や資格取得等が優先される傾向がある。南本(2016)が実施した調査においても、学校経営に関わる取組みとして、就業体験等を通じたキャリア教育の充実、生徒の学習意欲を高めるため専門学科の教育に関連した各種資格の取得が指摘されている。このため、例えば学科間の日程等の調整を行う場面では、長期の校外実習、資格取得の時期等が配慮されている。さらに当然ではあるが、職業指導について、専門を生かした就職や進学に関するガイダンス(Career Guidance)やカウンセリング(Vocational Counseling)では、専門学科教員の指導・助言の影響は大きい。このため、生徒は専門学科の活動が中心となり、学校の一体性が醸成されにくい課題が指摘されていた⁴⁾。さらに、専門学科の課題について、前述した南本(2016)の調査から学校長は、「中学生や保護者、中学校の教員、地域社会に、十分理解されていない」「専門高校から中学校のキャリア教育、進路指導を積極的に支援

3) 工藤文三(2009)「特集テーマ『高等学校教育改革の成果と課題』について」『国立教育政策研究所紀要』第138集pp.1-10において、新しいタイプの高校の導入により①生徒の選択幅拡大、多様なニーズへの対応が可能②高校再編整備を促進する契機となった③学校改革を促したことを成果として指摘している。

4) 岐阜県立海津明誠高校(2007)「生徒主体の進路行事で自主性の醸成を図る」『View21(高校版)』9月号pp.9-13、聖カタリナ学園高校(2016)「学校の一体感を醸成し、学び直しとICT活用で教育力を高める」『View21(高校版)』2016年8月号pp.34-37の記事でも学校の一体感を醸成する必要性が指摘されている。

(4) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

することが必要」等の意見がある一方、中学校から「専門学科の情報が乏しい」「専門教科の学習内容のイメージが掴みづらい」との報告も受けている⁵⁾。安易に一般化はできないが、2016年から3年間総合選択制高校の学校経営に携わった筆者も、当初同様の印象を持った。

1979年都道府県教育長協議会で「高校教育開発研究報告書」が提出されて以降、高校教育改革において、高校の個性化・特色化・多様化や入学者選抜の多様化・多元化等が進められた。その中で、新たなタイプの学校として「総合選択制高校」が提案され、設置されている。大分県においても2005年に「高校改革推進計画」が発表され、高校再編が進められ、8校の高校が総合選択制へ再編・統合された。この間、再編・統合された学校では、様々な実践事例が報告されている。しかし、総合選択制高校において、学校経営と職業指導の両者の視点に立った実践研究は多くない。また、少子化等の影響で志願者減少への対応を迫られる学校長にとって、総合選択制の特色を活かして学校教育活動の充実を図り、中学校や地域への浸透を図る取組みは、同様の事情を抱える学校への参考資料となると考えた。

このような問題意識から、本稿では、比較的最近設置され、5年以上経過している総合選択制高校（以下S高校⁶⁾と呼ぶ）での取組内容を検証する。S高校を対象にしたのは、総合選択制高校と類似している総合学科が設置され、さらに農業科、工業科、福祉科など多様な専門学科が設置されているからである。（学科名の表記は、学習指導要領の学科の分類による。）S高校においても、前述したように、再編・統合時には、学校の一体性が醸成されにくい、地域や中

5) 南本長穂（2016）「専門学科の現状と課題に関する調査-公立専門学科高校の校長等調査から-」関西学院大『教職教育研究センター紀要21号』pp.11-27において高校長を対象に調査研究を行っている。

6) 大分県高校改革推進計画 後期再編整備計画（2008）において、S高校は、2014年に開校し、学年進行で統合が進められ、2016年に統合が完成する。

学校等から理解されにくい課題を有していた。本稿では、これらの課題解決に向けて取組んだ実践の成果と課題を提示することを試みる。

Ⅱ 本研究ノートの枠組みと調査研究方法

具体的には、次の手法を用いた。まず、対象校が、地域、学科間連携を進めてきたことで生徒や教職員の意識がどのように変容し学校が活性化したか、(ア)教育課程(カリキュラム)(イ)総合選択科目の履修状況(ウ)地域や学科間連携を推進する体制と実践内容(エ)教職員・生徒の状況や地域との関係に着目して明らかにした。このうち、(ア)～(ウ)については、校内文書資料を検討し、(エ)については教職員や生徒からの聞き取りにより行った。

フィールドワークの方法論(箕浦編, 1999)では、生徒や教職員の意識の変容については、参与観察が基本となる。しかし、筆者はすでにフィールドを離れているため当時の校内文書やアンケート結果、記録等の文献資料から、できるだけバイアスを排除しデータを収集・分析し研究を行うこととした。次に、中学校への職業指導の支援、地域、学科間連携を重視した事情については、教職員の改革意欲に着目することで明らかにした。教職員の意欲に着目したのは、中学校卒業生減少の現状を踏まえ、地域からの信頼に応え、志願者の確保を図ることが急務であったS高校にとって、地域や中学校との連携を深めるための重要な要因となるためである。さらに、教職員は学校組織を形成、再編する主体であるためである⁷⁾。

なお、調査期間については、S高校が開校した2014年から2018年の5年間の内、筆者が同校に勤務した2016年から2018年の3年間を中心にまとめた。

7) 田中葉(1999)「『総合選択制高校』科目選択制の変容過程に関する実証研究」『教育社会学研究』pp.143-163、再編をめぐる教師の意思決定に着目している。

Ⅲ 職業指導 (Vocational Guidance) の定義の扱いについて

日本における職業指導については、1947年『学習指導要領－職業指導編（試案）』に「個人が職業を選択し、その準備をし、就職し、進歩するのを援助する過程である。」と記されている。さらに、1955年には、『中学校・高等学校職業指導の手引き－管理・運営編』が発表され、職業指導を「個人資料、職業・学校情報、啓発的経験および相談を通じて、生徒がみずから将来の進路の選択、計画をし、就職または進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長するように、教師が教育の一環として、組織的、継続的に援助する過程である。」(p.39)と定義している。

このように、以降、職業指導とは、求職者と仕事との関係から職業を決定するという特定因子理論（マッチング理論）(F.Persons,1909)だけでなく発達理論（D.e.Super,1951）にもとづく考え方が普及する⁸⁾。さらに当時の学校の職業指導については、農業・工業・商業・水産・家庭の教科との関連性を持たせながら職業指導を行われていたが、1961年度から特別活動の中で、生徒が主体的に進路選択を行うことができるように制度が整備されている。進路指導という呼称が、文部省で初めて使用されたのは、1957年11月11日の中央教育審議会答申「科学技術教育の振興方策について」である。そして、翌年の1958年『学習指導要領』において、職業指導から進路指導に用語が変更された。しかし、ここでの定義は、冒頭部分の職業指導を多少の表現の違いはあるが進路指導に変更した程度であった。次に、1983年には、「職業的自己実現」とともに「社

8) (独) 労働政策研究・研修機構 (2019) 「キャリア理論」『新時代のキャリアコンサルティング-キャリア理論・カウンセリング理論の現在と未来』 pp.13-25

F.Personsは、「個人の評価」「職業情報 (Vocational guidance)」「カウンセリングの実施」の3段階を経て職業が決定されると考えた。また、D.e.Superの発達論からのアプローチは、職業選択の一時点にとどまらず、生涯にわたるキャリア発達の解明に焦点をあてている。

会的自己実現」を包含する『進路指導の手引き－高等学校ホームルーム担任編』が発行される。その後、1999年、文部科学省中央教育審議会の答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」の中で、キャリア教育（Career Guidance）という呼称が用いられる⁹⁾。このように、職業指導、進路指導、キャリア教育と呼称は変化しているが、学校教育においては、職業的自立を図るために生徒や学生を指導援助することに大きな違いは無い¹⁰⁾。以上の経緯を踏まえ、本稿においては、職業指導を「人と仕事をつなぐための様々な支援・援助」ととらえ、高校及び中学校の職業指導の状況も踏まえて論述する。

IV 総合選択制の高校について

文部科学省は、前述した新しいタイプの高校¹¹⁾として、総合選択制を取入れ、学科の垣根を越えた教育課程を編成した高校を紹介している。ここでは、複数の高校が交流・連携を通して選択履修幅を広げる集合型選択制高校¹¹⁾が、千葉県（1980）、神奈川県（1983）に、その後3校を1校に再編・統合した総合選択制高校が埼玉県（1984）に設置されていることが分かる。総合選択制の定義として、それぞれの都道府県で様々な定義をしているが、多くが学科の枠を崩さず、入学時から各学科に所属する形態をとり、各学科では1年次から専門科目を履修して専門性を深めると同時に、2、3年次では他科の科目も一定数履修できる教育課程で編成されている。進学を目指す専門学科の生徒にとっては、普通科目の履修を増やせる。また、進学や就職を目指す普通科の生徒にとつ

9) 文部科学省編（2011）『高等学校キャリア教育の手引き』第1章第3節キャリア教育と進路指導 pp.39-44

10) 三宅章介・横山悦男（2018）『新時代のキャリア教育と職業指導』 pp.28-31
伊藤一雄（2018）「職業指導から進路指導への移行過程についての一考察」『技術教育の探求第10号』 pp.21-31

11) 菊地栄治（1996）「高校教育改革の「最前線」」耳塚寛明・樋田大二郎編著『多様化と個性化の潮流を探る－高校教育改革の比較教育社会学』学事出版 pp.28-44

(8) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

ては、専門教科を履修することで将来の進路に役立てることができる。学校としては、普通科、専門教科の教員層が厚くなるため、質の高い授業を展開できるメリットが指摘されている。

V 対象校の各学科の概要

次に本稿で対象とするS高校の概要について述べる。S高校は、市内の総合学科が設置されたH高と農業科と工業科が設置されたT高が再編・統合され、2014年に、農業科1学級、工業科1学級、福祉科1学級、総合学科3学級の計6学級の規模で開校された。初年度は、入学定員240人に対し、231人が入学している。その後、学年ごとに入学者を受け入れ、2016年度に全学年が揃い再編・統合が完成する。2017年度の在籍生徒数は631人、教員数は71人である。教科別教員数は、国語科5人、地歴・公民5人、数学4人、理科4人、保健体育6人、芸術3人、英語4人、農業8人、工業11人、商業6人、家庭4人、福祉8人、その他に特別非常勤講師として中国語1人、韓国語1人、手話1人となっている。生徒は、総合学科については推薦で定員の30%、その他の学科は15%以内で入学する。開校して4年間は入学定員が240人であったが、2018年から200人へ減少している。進路の状況について見ると、図表1に示したように2016年度の卒業生は、概ね54%が進学で46%が就職である。しかし、これは学科により大きく異なる。工業科や福祉科は、7割を超す卒業生が就職している。一方、

	4年制 大短大 等	専修・ 各種専 門学校	就職 等	計
農業科	3	16	19	38
工業科	1	10	26	37
福祉科	2	7	25	34
総合学科	30	54	33	117
計	36	87	103	226

図表1 S高校の進路状況
(2016年度卒業生)

(出典) 2017年度学校要覧p61

総合学科においては、就職は、3割に満たない。入学当初の志望動機も専門学科の生徒は、就職希望者が多く、総合学科においては、進学希望者が多い状況である。教育課程については、1年次は、各学科で普通教科を中心に学習する。2年次からは、図表2で示したように普通教科・専門教科に

加え、他学科の科目を履修できる自由選択科目（総合選択科目）が2・3年次に開設されている。生徒の進路や興味・関心に応じて履修することができるが、3年次は、他学科の科目の履修者は少ない。とりわけ、福祉科については、介護福祉士養成教育のための教育課程を編成しているため、他学科の科目を履修する余裕がない。

(2年次)		1*~31* (HRは除く)			
総合学科	人文・自然	普通教科・科目 (25*)		自由選択科目 (4*)	
	情報	普通教科・科目 (14*)	商業系の科目 (11*)		選択科目 (2*)
	ビジネス		家庭系の科目 (11*)		
	生活創造				
農業科	普通教科・科目 (15*)	専門教科・科目 (12*)			
工業科					
福祉科	普通教科・科目 (13*)	専門教科・科目 (18*)			
(3年次)					
総合学科	人文・自然	普通教科・科目 (27*)		自由選択科目 (4*)	
	情報	普通教科・科目 (12*)	商業系の科目 (15*)		
	ビジネス		家庭系の科目 (15*)		
	生活創造				
農業科	普通教科・科目 (10*)	専門教科・科目 (17*)			
工業科					
福祉科	普通教科・科目 (13*)	専門教科・科目 (18*)			

図表2 S高校の2017年度教育課程表（2年・3年）

- *1 2017年度学校要覧をもとに、教育課程表を理解しやすいよう筆者が編集した。
- *2 総合学科については、1年次に原則履修科目である。「産業社会と人間」を履修した後、2年次から進路等に応じて4つの系列に分かれ専門教科・科目の学習をする。
- *3 *数値は単位数 単位数は、週当たりの時間数と同数になる。なお、1単位時間は50分である。

VI 学校の一体感を醸成する取組み

以上、S高校の総合選択制の概要が明らかになったところで、なぜ学校としての一体性が醸成されにくいのかを考察する。総合選択制として再編・統合された学校の報告¹²⁾を整理し、以下の2点に焦点をあて考察することにした。

第1に、他学科の学習内容は、自学科で学習している内容と大きく異なるた

12) 大分県教育委員会 (2014) 『高校改革フォローアップ委員会報告書』において2005年から2014年の10年間の高校改革の成果と課題について第三者により検証された内容が報告された。報告内容には、再編・統合された学校からの報告もまとめられている。

(10) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

め、他学科の活動に関心を持たない傾向がある。これは、S高校の自由選択科目の履修状況からも推測できる。図表3で示した2017年度教育課程表の自由選

科目群	2年次の自由選択科目	3年次の自由選択科目
自学科の生徒が専門性を深めるための科目	科目数 (6) 例) 地理B, 自動車工学・・・	科目数 (7) 例) 食品化学, キャリアアップ・・・
他学科の生徒が興味・関心を広げるための科目	科目数 (15) 例) 生活と福祉, 手話, 工業技術, 中国語, 韓国語, 食品製造, 計測, 農業経済・・・	科目数 (15) 例) 時事英語, 食文化, 幼児教育音楽, レクリエーション体育, 広告と販売促進, 作物・・・
進学を備えた学力補充のための科目	科目数 (4) 例) 国語表現, 古典B, 英語表現, 物理基礎	科目数 (5) 例) 小論文研究, 古典B, 化学基礎・・・
就職を備えた基礎学力補充のための科目	科目数 (3) 例) 時事問題・・・	科目数 (3) 例) 数学総合・・・

図表3 自由選択科目 (一部)

(出典) 2017年度S高校学校要覧p47

※1自由選択科目は、総合選択制高校の特徴で学科の枠を超えて学習ができる。S高校では、自由選択科目を4つの科目群に分類しているが、生徒は自由に選択できる。なお、各科目は、2単位である。

択科目は、自身の進路、適性等に応じて、学科の枠を超えて選択できる科目が開設されている。科目数は、2年次では、28科目、3年次は30科目が開設されている。また、これらの科目を2年次に4単位、3年次に4単位選択できる。しかし、2017年度の2年次の選択者数は、「地理B」「古典B」等の進学者向けの科目、「生活と福祉」「工業技術」「農業経済」等の他学科向けの基礎科目の選択者はいなかった。

また、「計測」「中国語」の科目についても、10名以内でかなり選択者が少ない。選択の傾向としては、自学科の専門性を深める科目を選択する傾向が強い。もちろん、科目選択は、自学科教員の助言や指導の影響も考えられるが、2017年度の卒業生の意識調査では、入学動機に「専門的な学習をしたかった」と答える割合が高く、「専門的な資格取得や学習を行えたことに満足している」との声も多かったことを考えると、専門性を深める自学科の科目を自ら選択したことが伺える。

第2に、職業指導について、学科による指導体制が強く、学校全体の共通目標が希薄であるため、他学科への関心が薄くなる傾向がある。2017年に進路指導の体制に関する課題を(独)労働政策研究・研修機構が、高校の進路指導関

係者を対象に行った全国調査結果では、専門高校を中心とする高校において、教師の約5割が、「学校としての進路指導方針やビジョンが不明確で、教員間で共有されていない」と指摘している。(図表4参照)

ここ数年～現在までに主な課題として考えられることの評価（専門高校を中心とする高校）

		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない
体制に関わる課題	課題5 入試制度の多様化や変更にとまなない、学校での指導や対策が難しくなっていること	24.8	46.2	26.1	2.9
	課題6 教師の負担が多く、進路指導の時間が十分にとれないこと	44.7	41.2	13.1	1
	課題7 学校としての進路指導の方針やビジョンが不明確で、教員間で共有されていないこと	12.1	36.1	45.4	6.4
	課題8 進学や就職の実績をあげなくてはならないこと	9.7	30.9	48.9	10.6

図表4 「学校種別に応じた進路指導の課題」

(出典) (独) 労働政策研究・研修機構「高等学校の進路指導とキャリアガイダンスの方法に関する調査結果」2017.3.31

※ 体制に関わる課題のみを抽出して筆者が作成、数値は割合

S高校においても、年度末に報告される学校評価において同様の意見が学校評議員や関係職員から指摘されていた。

このため、S高校では、2017年に、学校としての進路方針やビジョンを明確にするため、全職員へキャリア教育プランとして「指導目標と指導項目」を提示した。これを示した理由は、上記の指摘を受けたこともあるが、これまで学科の系統性を重視していた専門学科の教職員に対して、他学科や学年との連携を意識させることを期待したからである。図表5に、1年から3年までの学校の「指導目標・項目（一部）」を示しており、その横に総合学科の取組内容、次に各専門学科、進路、教務等のそれぞれの取組内容の一部を記載している。本キャリア教育プランの作成作業は、各学科で検討と作成を行った。各学科の活動内容について専門学科の教員が徐々に意識できるようになったことは効果があったと考える。

(12) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

学年	月	指導目標・項目	総合学科	・農業科 ・工業科 ・福祉科 ・進路指導 ・調査／資格 ・個人面談 ・その他
1	4 5	学習習慣の確立 予習→授業→復習 ・出席・欠席・遅刻の扱い、授業の取組方を学ぶ ・定期考査の準備の仕方を学ぶ	自己発見・自己挑戦 「産業社会と人間」概要説明、「2年生に学ぶ」、進路学習概要説明 進路学習①②	・農業科 ・工業科 ・福祉科 ・進路指導 ・調査／資格 ・個人面談 ・その他
2	4 5	新学年の自覚と決意 ・テストの結果から家庭学習時間量を見直す	自分や社会の課題を知る 「夏の活動」概要説明 個人面談「夏の活動」事前準備	全商簿記検定 面接旬間 科目選択面談
3	7 8 9	推薦入試、入社試験への追い込み ・就職先の絞込み、早めに準備 ・苦手科目対策に取り組む。 ・就職力・面接試験の仕上げを行う。	・1学期の研究内容まとめ ・夏季休業中の研究結果まとめ ・学年中間発表会(各ゼミ代表)	簿記校内模試 進路別集会

図表5 S高校キャリア教育年間指導計画

(出典) S高校人材育成協議会第1回提出資料 2017.9.4をもとに筆者が編集

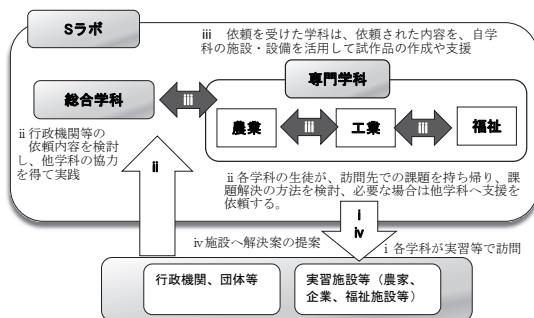
続いて、各学科の専門的な学習について、他学科の生徒も興味・関心が持てるよう学科間の連携推進を組織化することに取組んだ。

(1) 「Sラボ」を通して学科間連携を深める取組

2017年に県教委の「地域の高校活性化支援事業」の指定を受け、学科間連携を深めるため、校内に図表6に示す「Sラボ」を組織した。

「Sラボ」は、生徒が、実習先等で感じた課題や地域の行政機関等から依頼を受けた課題を、学科で検討し、必要な支援を他の学科へ求める仕組みである (i) (ii)。

依頼を受けた学科では、依頼先の学科と協議を繰り返し、試作品等を製作する (iii)。試作品等は、完成後実習先へ紹介する



図表6 「Sラボ」での学科間連携の流れ

(出典) 平成29年度「地域の高校活性化支援事業」S高校 2017.12.13をもとに筆者が編集

(iv)。なお、調査・研究、試作品製作等に必要な費用は、全て「Sラボ」で負担することとした。この「Sラボ」で取組んだ活動の一部を、次に紹介する。

①福祉科と工業科の連携

まず、福祉科と工業科との連携である。福祉科では、高齢者福祉施設等で長期間の実習（3年間で59日）が行われる。この施設での体験から、高齢者のレクリエーションで使用する道具（卓球ラケット）製作を工業科へ依頼することになった。市販の道具を使い活動している高齢者の使いづらそうな様子を見ていた生徒からの発案である。依頼を受けた、工業科では、プロジェクトチームを組織して、福祉科の授業を聴講することで、高齢者の実態を理解することから始め、夏休みを利用して道具の制作に取組んだ。福祉科では、その試作品の改善のため工業科と協議を繰り返した。福祉科の生徒からは、「グリップの加工が滑らかでさすがに工業科だと思った」工業科の生徒からは、「これまで福祉科の授業に参観したことがなかったので勉強になった」などの感想もあったが、一方無回答の生徒もあり、1度のイベントでは、学科間の連携を深めることは難しいとも考えた。

②総合学科と農業科との連携

続いて、総合学科と農業科との連携である。行政から地元の農産物を使用した商品開発の依頼を受けた総合学科の生徒が、農業科の生徒の指導を受け、「紅はるか¹³⁾」の苗の定植、栽培を行った。農業科（2年）の管理する圃場の空きスペースを利用して植え付けを行った。総合学科の生徒（2年）は、苗を植えるための畝の準備、植え付けの間隔、ホワイトシートで覆う作業、定期的な灌水など苦労はあったようであるが、無事に収穫できた。総合学科では、収穫した「紅はるか」を使用して「スイーツ」の商品開発を行った。この開発過程に

13) 「九州121号」と「春こがね」を交配させて誕生した比較的近年に登場したサツマイモ。九州沖縄農業研究センターによって2010年に品種登録

(14) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

は、農業科の生徒も参加した。農業科と総合学科は、これまでも、市内に開店したS高校のアンテナショップでも連携を深めており、今回も円滑に取組めたようである。実際に栽培を行った総合学科の生徒からは、農業科が季節に関係なく、水やりやハウスの換気など様々な作業を通して農作物の栽培を行っていることに感嘆していた。これまで知らなかった作業を実際に体験することで他学科の学習内容への関心が深まったことが伺える。

学科間連携を深める難しさもあるが、工業科の生徒がドローンの操作法を農業科へ指導する場面も生まれるなど次第に学科の専門性を活かした連携の事例が増えてきた。

(2) 他学科の「学び」を知り、自らの進路を考える「4学科合同学修成果発表会」の実施

各学科では、課題研究等を通して、自らテーマを決めて1年間研究を行い、年度末に学科内で発表会を実施する。これを、2017年からは、地域や小中学校へ向けて公開することにした。市内の文化会館を使用して、各学科で選抜されたチームが、発表を行った。発表内容は、専門的ではあるが、各学科の発表者は、具体的に写真や実物を提示することで、前提知識が無い者でも理解しやすいように工夫をしていた。図表7に発表者と発表テーマの一部を示す。また、その際に配布された資料の一部を図表8に示す。図表8は、工業科3年が発表した電動車いすを製作した記録資料の一部である。

本発表会の生徒のアンケート結果を見てみると、「他学科の課題解決の手法が違い、勉強になった」「農業科と総合学科の連携がうらやましい」「自分の学科の大変さを他の学科が理解してもらえたことが嬉しい」「次年度に学習する概略が理解できたことが良かった」など様々な「学び」に刺激を受けていることが分かる。また、専門学科の生徒から、「総合学科の学校見学や職場体験では、将来に夢が広がり興味を持った」という反省も寄せられた。専門学科の生徒に

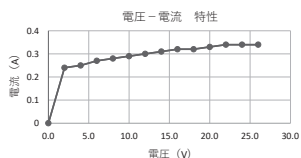
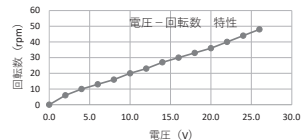
	発表者	テーマ
①	農業科3年	農業科3年の軌跡
②	工業科3年	ものをつくる～自分たちの学校模型を作ってみよう～
③	福祉科2年	高齢者サロンの活動について～ 〇いっき楽しく過ごそう～
④	総合学科1年	産業社会と人間～アンテナショップ味来堂～
⑤	総合学科2年	「未来」へつなげる「虹」をかける
⑥	農業科	キクでリメ育～smile花プロジェクト
⑦	工業科3年	電動車いすの製作
⑧	福祉科3年	介護実習から考える～食事介助～
⑨	総合学科3年	「未来」の時間

図表7 発表テーマ一覧（一部）

（出典）2017年度4学科合同学修成果発表会
2018. 2. 1から筆者が編集

② モーターの特性測定

電圧 (V)	電流 (A)	回転数 (rpm)
0.0	0	0
2.0	0.24	6
4.0	0.25	10
6.0	0.27	13
8.0	0.28	16
10.0	0.29	20
12.0	0.30	23
14.0	0.31	27
16.0	0.32	30
18.0	0.32	33
20.0	0.33	36
22.0	0.34	40
24.0	0.34	44
26.0	0.34	48



このデータを元にタイヤの直径とモータの毎分の回転数から、車イスの速度を計算しました。

計算式：回転数48 (rpm) × 車輪の円周率の長さ1.92 (m) = 92.16m/min

時速に換算：92.16 (m/min) × 60 (min) = 5.53Km/h

となり、計算上は時速約5km/hということがわかりました。

図表8 電動車いすの制作レポート（抜粋）

とって、専門的な学習を通じて関連する企業や大学等へ進路を決定する生徒が多い。このため、進路希望に応じて様々な体験活動を行い、自由に進路を選べる総合学科の学び方へ関心を持ったようである。このように、合同発表会へ参加し、自分の進路を考え直す生徒も複数いたようである。さらに、今回の発表会では、市教育委員会などの教育関係者のみならず、他県からの参加者も多数あった。注目度の高さが伺える。

Ⅶ 地域の中学校等の職業指導充実に向けての支援

続いて、職業教育の学習内容を地域や中学校等へ広げる取組みについて考える。2017年3月に告知された学習指導要領において、中学校では、キャリア教育の充実が求められている。ここには、「社会的・職業的自立」、「特別活動を要としつつ各教科等の特質に応じてキャリア教育の充実を図ること」や「体験活動の推進」が示されている。一方、中学校で取組まれている「職場体験」について、「職場体験のみをもってキャリア教育の実施としていないか」「職業を

(16) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

通して未来の社会をつくろうとする視点が乏しいのではないか¹⁴⁾といった課題も提示されている。さらに、2015年の職場体験の実施率は、98%であったものの、5日間実施する学校は、8年連続で減少してきている。2004年度から様々なキャリア教育推進施策に着手してきた文部科学省では、2005年度に産学官の連携による職場体験活動・インターンシップの推進のためのシステムづくりを目指した「キャリア教育実践プロジェクト」を開始し、中学校を中心に5日間の職場体験活動を推奨してきている¹⁵⁾。しかし、県内においては、5日間の職場体験を実施している割合は、2010年の調査結果では、4.5%で全国平均16.7%に比べ低い割合となっている。このような背景から、S高校と地域の中学校が連携し、職場体験の事前学習や職業に関する学習を深める機会を提供することで、職業指導の充実を図ることにした。

(1) 小・中学校の職業指導充実を図る「S高校アカデミー」(出前授業)実施

S高校では、専門学科で学ぶ生徒や指導教員を中学校等へ派遣する「出前授業」に取り組むことにした。これまでも、同様な取り組みは実施してきたが、小規模校において指導が難しい「技術・家庭科」向けの講座を追加した。事業内容を見直し、一時のイベントに終わることなく事業を継続できる体制も整えることにした。図表9に2018年度の実施メニューを示した。小・中学校向けに、全21講座を用意した。このうち「技術・家庭科」向けの講座は、8講座を用意している。中学校からは、学習指導要領への位置づけが明示されているため活用しやすいと好評であった。2018年度は、小学校98名、中学校75名が参加し、12

14) 文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官児童生徒課生徒指導調査官 長田徹「新たな学習指導要領におけるキャリア教育」pp.1-6
https://www.mext.go.jp/apollon/mod/pdf/newcareer_h28_20180223.pdf
(2022/08/25)

15) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2012)「職場体験・インターンシップ実施状況等経年変化に関する報告書」p.106

「総合的な学習の時間」対応					
学科	授業タイトル	授業内容		対象	時期
農業科	野菜の作り方!	○野菜（トマト・ナス・ピーマン・ホウレンソウ・人参等）の育て方について学びます。		小・中	6月～9月
工業科	距離を測るにはどんな方法がある？	○歩測から光波を使った距離測定まで、距離を測るいろいろな方法を体験します		小・中	年中
福祉科	鉛筆？いいえ、点筆と言います。	○楽しく、点字を覚えます。点筆を使って文字を打ち、触って読んで。1時間で自分の名前やお友達の名前を書ける		小・中	年中
総合学科	SHAプロジェクト	○ご当地キャラクターを考えて、オリジナル缶バッジを作成します。ふるさとの魅力を発見		小・中	年中
「技術・家庭科」対応メニュー					
学科	授業タイトル	内容のまとめり (学習指導要領)	授業内容	対象	時期
農業科	手軽で簡単！ベビーリーフを栽培しよう！	C 生物育成に関する技術(2)	ペットボトルを利用して、ベビーリーフに適した栽培環境をつくり、種まきを体験します。植え付けから収穫までの管理作業計画や方法について学びます	中	年中
工業科	暗くなると自動で点灯するLEDライトの設計と製作(電子回路)	B エネルギー変換に関する技(2)	基板に電子パーツを組み込みながら、暗くなると自動点灯するための電子回路を作製します。それぞれの電子パーツの働きや組み込みの際の留意点について学びます。	中	年中

図表9 S高校アカデミー「出前授業」メニュー（掲載は一部 全21講座 2018年度）
筆者が一部修正

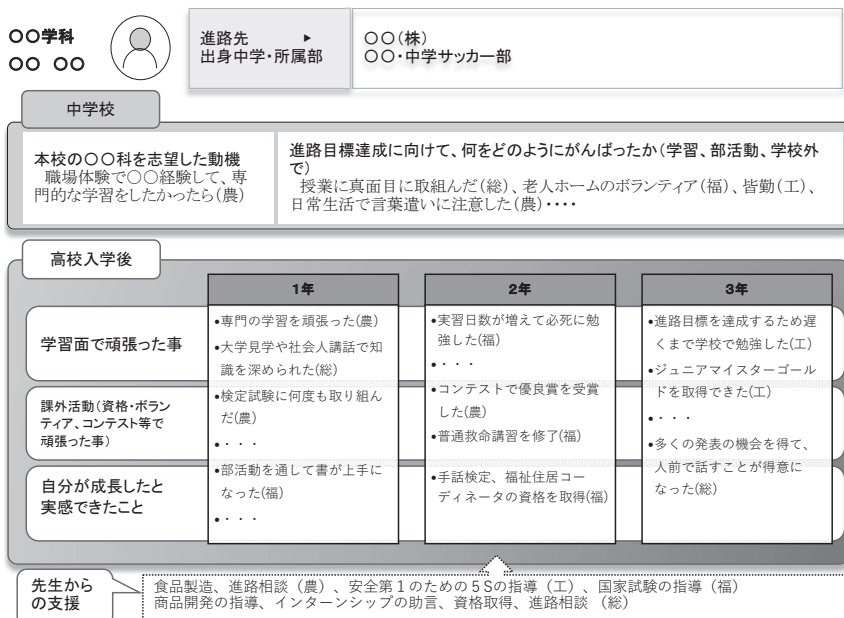
講座を実施した。参加したS高校の生徒からは、「自分が学習していることが役立った」という意見がある一方、「小中学生を教えることは難しい」などの意見も寄せられた。また、教員からは、「事前準備に時間がかかった」「生徒が生き活きしている姿を見て、嬉しかった」などの負担感を感じるものの生徒の成長に満足しているようであった。

ペットボトルを飛ばし、落下した場所までの距離を、測量器機を使用して距離を測定する授業では、中学生から、正確に距離を測れる事に驚くとともに、実際に土木工事で利用されている事に興味を持ったようである。これらの取組は、現在でも取組まれており、市内の小・中学校に定着してきた。

(2) 中学校の職業指導充実のため卒業生の「成長の軌跡」を全中学生へ配布

小・中学校の職員からの聞き取りをする中で、S高校の学びが生徒にどのような成長をもたらしているのかイメージが掴みにくいとの意見が寄せられた。このため、2017年度から図表10に示したように卒業生がS高校で3年間学んだ

(18) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察



図表10 S高校 成長の軌跡～夢実現へのロードマップ～ 2017.6発行

*掲載項目を中心に筆者が編集、一部実際に記入されている内容を例示(農)農業科(工)工業科(福)福祉科(総)総合学科

成果(ポートフォリオ)を整理し、自身の言葉で記載した「成長の軌跡」を発刊し、市内の中学3年生全員に配布することにした。この冊子には、①S高校の各学科を志望した理由やそのため中学校でどのような学びに取り組んだか? ②S高校でどのような学習、課外活動等に頑張り成長したか? ③S高校でどのような支援が成長に役立ったかを記載している。掲載卒業生は、各学科5名~10名程度である。卒業生が、将来のどのような職業を目指し、そのために必要な知識や経験を得るため高校でどのように過ごすのか、高校からどんな支援が受けられるのか、卒業生の視点でまとめられた本冊子は、中学校からは高い評価を受けた。

(3) 「S高校人材育成推進協議会」の設置と教職員の意識の変容

次に、S高校の各学科の教育活動に様々な立場からの意見や助言、評価を受ける協議会を設置した。この協議会の設置により、S高校のPDCAサイクルが円滑に回り始め、教職員の意識にも変容が見られたように感じている。

①各学科を支援する「S高校人材育成推進協議会」の設置

S高校は、2016年に県教委から研究指定を受け、地域のビジネスの活性化を推進し、地方創生に貢献する人材の育成を目指す取組みを3年間実施した。その際に、校内に人材育成推進協議会を設置した。市内の農業法人、先進農家、水産物加工・機械製造・医療機器製造・化学製造等の各企業の責任者、工業連合会、県・市の行政機関、大学等の学識経験者他約15名を委員として委嘱し、S高校の学習活動充実のため意見交換を行う場を設けることにした。年数回開催されたこの協議会では、様々な意見が寄せられている。一例を挙げると、「新たな技術を活用して農業経営を行っている現場を知ると良い経験になる。」「学科間の連携を活発にしてはどうか。違う意見を聞くことで社会が成り立っている。」「地域と連携し視野を広げて欲しい。」など各学科に対する個別な意見でなく、学校全体の教育活動改善に対する助言であり、各学科の担当教員は、他学科との連携を考える良い機会になった。

また、各委員からは、学科の取組内容に対し、様々な視点で評価も受けている。前述した「2017年度4学科合同学修成果発表会」で紹介された工業科の「電動車いすの製作」については、水産加工業や農業法人の委員から「意見を出し合いながらより良い製品を考える姿に、ものづくりの良さを改めて感じた」「他学科と連携して取組むことで、地域の小さな課題解決に期待が持てる」と高く評価されていた。さらに、同じく学科間連携「Sラボ」で紹介した農業科と総合学科の連携による「紅はるか」の栽培については、栽培活動にヒントを得た

(20) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

生徒が考案した「甘酒お芋パン」¹⁶⁾が地域のコンテストで最優秀賞を獲得した。福祉施設長の委員からは、この成果に対し「学科間連携は新鮮であった。福祉科も食に関する連携に取り組んではどうか。」と評価していた。

②作業部会を通して教職員の意識の変容

以上のように、各委員からの助言や評価に各学科主任は、地域、学科間連携により、学校と地域の両者が課題意識を共有することができ、生徒の学びに向かう姿勢に変化がみられるなど教育効果が大きいことを理解する。このため、協議会からの助言を踏まえ、S高校の教育活動の改善を検討するため、作業部会が設置される。作業部会は、年6回程度開催され、様々な議論が繰り返された。その中で、福祉科では、「自ら課題を見つけ、主体的に解決に向かう態度・資質を育成」と学科の目標を設定し、課題解決を強く意識するようになった。また、農業科では、福祉科と連携して特別支援学校への出前授業に取り組むなど、他学科との連携の意欲の高まりが見られた。工業科においても、「S高アカデミー(出前授業)」のメニューの改善を図り、工業の魅力を伝えようとする意欲の変化が見られた。さらに、総合学科では、地域、他学科との連携が一層進むことになった。市観光課と連携した「観光ボランティア」の取組み、消防署と連携した「高校生防災士養成講座」の開設、県主催の「地産地消コンテスト」への参加など多様な取組みが実現できた。

このような活動の広がりにより、生徒は、各学科での学びが、地域や学科間連携の中で活かされることを実感し、学校の活動に高い評価を得ることで、学校への帰属意識が徐々に醸成されている。これは、活動が本格化した2017年度の卒業生のアンケートで、約8割を超す生徒が「高校生活の3年間に満足している。」また、9割の生徒が、「学校での学習や活動が進路目標の達成に役立った。」と答えていることから分かる。そして、教員の意欲の向上には、西村(2013,

16) 大分合同新聞「第5回さいき食のスター誕生」2018.2.13朝刊に掲載

p231)は、学校と地域との連携に関して、子どもの成長を鍵とした教員と地域双方が目的意識を共有していること、教員が力量形成の機会と意識している点が重要であると指摘している。連携の中で作業部会を運営した教員は、生徒の成長を実感し、自身の視野を広げ、学校経営に向き合う姿勢へ発展している。一方、生徒や保護者が地域、他学科との連携に必ずしも肯定的でない現状もある、活動内容が生徒の成長に資する目的から逸脱する恐れもあるとの課題については、今後も運営体制等に改善の必要性があることを指摘しておく。

VIII まとめ

以上、S高校における職業指導の充実に関する取組事例を概観した。本稿では、総合選択制高校という新たなタイプの学校において、「学校の一体感の醸成」、「地域の中学校等や校内の職業指導の充実」に着目し、その活動内容を検証した。5年経過し2018年には、長年の懸案だった志願者数が定員を上回るなど、一定の成果を上げてきた。その要因として、地域や学科間連携の取組みに、教職員が改革意欲を持って能力を発揮したこと、多くの生徒が積極的に取組んだこと、また、地域人材を活用し、結果をフィードバックする組織の存在が大きいことが分かる。そして、これまで開校に向けて実績を一つひとつ積み上げてきた成果も忘れてはならない。当時の資料からは、新設校としてスタートに向け、意欲を持って職員は活動し、地域からの期待も大きかったことが伺える。

本稿では、地域や中学校、学科間の連携を中心に論述してきたが、S高校では、この他に各学科を中心に地域連携に積極的に取組んでいる。一例を挙げると、2016年から始めた総合学科が運営する「市内に設置したアンテナショップ」や「地域活性化に係る様々な取組」、農業科では、「花を植栽したプランターを地域の公共施設へ寄贈する取組」、福祉科では、地域の福祉協議会と連携した「高齢者サロンでの取組」、工業科では、地元の電力会社や造船会社から支援を受けた「資格取得の取組」などである。このような実績を積み上げ、S

(22) 総合選択制高校における職業指導の充実に係る一考察

高校の魅力が次第に地域へ広がりを見せている。

新設校として様々な支援を受けた事例ではあるが、同様な課題を有する学校においてこれらの取組内容が解決の一助となることを期待したい。

現在、高校において新たな学習指導要領が学年進行で導入されている。このような中、今後の総合選択制高校の学習形態も変化を求められる。今後は、総合選択制高校の強みを生かして、教科間の連携、「主体的・対話的で深い学び」「個別最適な学び」「協動的な学び」を実現する専門教科の学習指導法についての研究を深めていきたい。

参考文献・引用文献

- (1) 菊池栄治編著 (1997.2.28) 『高校教育改革の総合的研究』 pp.3-24多賀出版
- (2) 耳塚寛明・樋田大二郎編著 (1996.12.25) 『多様化と個性化の潮流をさぐる－高校教育改革の比較教育社会学－』 pp.29-58学事出版
- (3) 佐藤史人・伊藤一雄・佐々木栄一・堀内達夫編著 (2018) 『新時代のキャリア教育と職業指導－免許法改定に対応して－』 pp.1-41法律文化社
- (4) 箕浦康子編 (1999) 『フィールドワークの技法と実際－マイクロ・エスノグラフィー入門』 ミネルヴァ書房
- (5) 文部科学省 (2011) 「第3節キャリア教育と進路指導」『高等学校キャリア教育の手引き』 pp.39-44文部科学省
- (6) 労働政策研究・研修機構 (編) (2019) 『新時代のキャリアコンサルティング』 (独) 労働政策研究・研修機構
- (7) 大河内信夫 (2000) 「高等学校総合学科の科目選択の実態と進路との関係」『産業教育学研究第30巻第2号2000年7』 pp.43-50
- (8) 田村学・廣瀬志保編著 (2017) 「探求」を探求する－本気で取り組む高校の探求活動－』『月刊高校教育増刊』 p102-109学事出版 にS高校総合学科の取組内容が紹介されている
- (9) 西村吉弘 (2013) 「第10章 地域との協働性に関する教員の意識－学校と地域の連携組織に着目して－」『Co-teachingスタッフや外部人材を生かした学校組織開発と教職員組織の在り方に関する総合的研究最終報告』国立教育政策研究所 pp.223-232において、「学校と地域の良好な連携は新たな学校組織の活性化や地域の発展性に寄与する可能性を含んでいる。」と述べている。

参考資料

- (1) 大分県教育委員会が公開している資料
 - (2005) 「高校改革推進計画～特色・魅力・活力ある高校づくりに向けて
 - (2008) 「後期再編整備計画（中間まとめ）」
 - (2014) 『高校改革フォローアップ委員会報告書』
- (2) 文部科学省が公開している資料
 - (2001) 「専門高校と小・中学校との連携推進事業」『中等教育資料 9月号 2001』 p98-101
 - (2012) 「専門学科等における職業教育の充実について」 2012.2.16高等学校教育部会（第5回）配布資料 資料5
 - (2015) 「職業に関する各教科の現状と課題について」 2015.12.16教育課程部会 産業教育ワーキンググループ（第2回）配布資料 資料3
- (3) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2012）「職場体験・インターンシップ実施状況等経年変化に関する報告書」
- (4) 新潟県教育委員会（2016）「これからの10年間を見据えた新潟県の高校再編整備計画」『View21 2016 Vol.3』 ベネッセ教育総合研究所 pp.34-37